

1 カドガンホテルでのオスカー・ワイルド逮捕劇

- 彼は炭酸水^{セルツァ}で薄めた辛口ワインをすすりながら
ロンドンの空を見つめていた
ノッティンガム・レースのカーテン越しに
それとも 彼の濁り目を通してだったのか
- 右手前方ポイント通りの 5
まっすぐのびるガードレールの真新しい赤い色が
乱れたベッドに差し込む
夜明けのガス灯のように目に痛い
- 「炭酸水^{セルツァ}で薄めた辛口ワインをもう少し
そして ロビー君 君の手を 10
今日で終わりか それとも 今日が始まりか
ぼくには見当もつかない
- 「君が持ってきてくれた最新号の『イエローブック』では
バカンがすっかりぼくの指定席を奪ってしまった
承認されたものの追認など 15
守秘義務の誓いと同様にうさん臭いものよ
- 「ロビー君 辛口ワインをもっと 炭酸水^{セルツァ}が切れただと
だったら またベルを鳴らすのだよ 君
能無しボーイらをこき使うんだ
腐ってもここは カドガンホテルさ 20
- 「アストラカン・コートはウィリスの店に
もう一着はサボイ・ホテルに預けてある
モロッコ革の旅行カバンをこちらに
コートは 君 後ほど届けてくれたまえ」
- ドシンドシンという足音 そして つぶやき声 25

（「どうして 無粋な物音を立てるのか」）
ベッドルームのドアがパタンと開いて
私服の警官が二人入ってきた

「ワイルドとか言うおっさんよ しょっぴかせてもらおうか
凶悪犯どものブタ箱までな 30
おとなしく退場だ
なんせここは カドガンホテルよ」

彼は立ち上がり 『イエローブック』を放り出す
よろめいて それから 怖い目つきで
階段を 両の手の平で撫でるように降りてゆき 35
外で待つ二輪馬車に 抱え込まれたのであった

（山中光義訳）